

場面緘黙生徒への筆談による心理面接 —「しりとり」から「箱庭」へ—

山倉 辰裕 (新潟青陵大学大学院臨床心理センター)
佐藤 忠司 (新潟青陵大学大学院)

キーワード：場面緘黙，相互的やりとり，主題付け

Psychotherapeutic Communication by Mutual Writing to A Schoolboy with Elective Mutism —from 「Shiritori」 to 「Sandplay Therapy」—

Tatsuhiko YAMAKURA (Clinical Psychological Center in Graduate School of Niigata Seiryu University)
Chuji SATOH (Graduate School of Niigata Seiryu University)

Key words : elective mutism, mutually communication, give a theme

I はじめに

面接を始めるにあたり、まず初め考慮したことは、場面緘黙をどう捉え、どのような姿勢でクライアント（以下、CI）と会っていくかであった。場面緘黙の治療場面においては、“ゆっくりとした進展こそが必要なのであり、ここで、カウンセラーが深めることを焦ると、中断して失敗に終わることも多い”（河合隼雄、1969）と言われている。筆者は場面緘黙を“対人的な緊張感、言葉を発することへの不安感から自分を守るための防衛手段である”と捉えた。そして、言葉を発さないという行動の裏側にある緊張感や不安感を、面接を継続していく中で解きほぐしていくことを念頭に置き、焦らず気持ちにゆとりを持つことを心掛けて面接に臨んだ。その中で、筆談による「しりとり」や「古今東西」ついで「箱庭」が導入され、それらを用いてCIと筆者の相互的なやりとりが交わされた。本論では、幼児期から場面緘黙を呈した思春期男児のCIとの面接過程を、箱庭を中心に相互的やりとりがどのように展開したか、それを通して二人の関係がどのように築かれていったかを考察する。また、場面緘黙のCIにとって、どのように“箱庭がよき表現の素材”（河合隼雄、1969）となるのか検討する。

II 事例の概要

【クライアント】 A 13歳 男

【主訴】 幼稚園の頃から場面緘黙があり、初回面接時（中学一年在学中）不登校状態にあった。

【家族構成】 父（56）母（55）兄（27）姉（24）

【生育歴・問題歴】 2歳の頃、椅子から落ちて頭を打ったが、MRI、脳波ともに異常はなかった。幼稚園の頃は、先生が他の幼児を褒めて過ぎていたためか、Aは委縮していた。小学校では、挨拶や他の児童ができることができずに、担任に『なんでこんなこともできないのか』と連絡帳に書かれる。担任は水泳授業時の着替えをしないAに対し、他の児童に押さえつけさせて無理矢理着替えさせようとした。小学校は5年間、母親と病院に通い、母親は家族面接、Aは体育指導員とバスケットや卓球などをしていた。学業成績は普通。中学生になり他の生徒から悪口を言われるようになり、我慢してきたが、X-1年11月に、風邪を引いて休んだことをきっかけに学校に行けなくなる。Aの通っている中学校のスクールカウンセラーに紹介され当センターを来談する。家族とは自由に話すことができる。しかし、別居していた祖母が一時同居していた時、その祖母とは一度も話さなかった。

【外見・印象】 A：色白でほっそりとした印象。おど

おどした表情。

【対応】1/2Wの親子並行面接。#51より1/MでAのみ面接に変更。CLの面接は山倉、インテークと家族面接は佐藤が担当した。

Ⅲ 面接経過

以下、面接の経過を1～4期に分けて報告する。〈〉内はThの言葉、《》内はThの書いた言葉や箱庭で置いた玩具、箱庭のタイトルとする。『』内はAの書いた言葉や箱庭で置いた玩具、箱庭のタイトルとする。□内は親面接からの情報である。

第1期 #1～#6 (X年1/16～3/23)

出会いと筆談を用いたやりとり

#1、父親と共に来談。A、父親の順でインテーカーが面接し、セラピスト（以下、Th）は陪席。途中からAとThはプレイルームに移動する。Thの方からトランプやオセロなどを勧めてみるが、Aは最後まで何にも手を付けない。ThはAに対してどう接するべきか戸惑い、焦る。どんな漫画やTVゲームが好きかなどあれこれ矢継ぎ早に質問すると、Aは問い掛けが合っていればうなずき、そうでなければうなずかないという方法で答える。話の中で【少年ジャンプ】と【ガンダム】が二人の共通の話題となる。#1.5、面接予定日に「本人が行きたがらない」とキャンセルの電話が入る。Thは、#1のような一方的なやりとりをこのまま続けていくことはお互いにとってしんどいだろうと考え、新たなやりとりの必要性を感じる。Aがインテーカーの質問に対して、筆談で答えることは可能だったことから、筆談でのしりとりを思い付く。

#2、箱庭を勧めてみるがAはうなずかない。しばらく話をした後、筆談でのしりとりを提案してみると、これにはAはうなずき、Thが最初に《ガンダム》と用紙に書いて渡す。Aはあまり考え込まず『むし』と書き、その後もAはテンポよく書く。Thは#1とは違う、相互的なやりとりができたように感じる。また、しりとりを通してAの意志の強さや粘り強さも感じる。

#3、しり通りのテーマを決めることを提案する。また、#2とは逆にAから先に書く。Aは最初に『くり』と書き、Thが〈テーマは食べ物？〉と聞くと、うなずく。途中、何度かAが考え込んで手を止めることがあり、Thから〈パス3回までありにしようか〉〈別の物に変えようか〉などの妥協案を出す。Aは

それにはのらず、じっと思いつくまで考えて書く。その様子にThは頑固さにも似た粘り強さを感じ、しりとりの中に勝負の要素が入ってきたように思う。Thの《しめじ》で終了時間となったため、〈来週はこの続きからやるから『じ』のつく食べ物なにか考えてきてね〉と伝える。Thはしりとりで手応えを感じ、それを発展させた新たなやりとりの可能性について考える。[Aは歴史が得意である]

#4、待合室において、父親に話し掛けられ、Aが笑うという場面が見られる。腕で顔を隠し、声を殺してAは笑う。しりとりを始める前に、〈この前は『じ』で終わったけど考えてきた？〉と聞くと、Aはうなずく。#3で言った言葉を覚えていてくれたことをThは嬉しく感じる。Thの書いた《げそ》をAは知らなかったが、Aの書いた『シンコ』をThは知らず、やり返されたように感じる。終了時間になり、次回何をするかAが決めることを提案する。〈①しりとり②絵でのしりとり③古今東西から選んで丸付けて〉と説明しながら紙に書いて提示すると、Aは③に丸を付ける。お題についても、《スポーツ》《歴史》《こち亀（少年ジャンプで連載されているAの好きな漫画）》の中からAは《歴史》を選択する。

#5、古今東西のルールについて確認し、ジャンケンでThが勝ったため先に書き出す。Aは著名な歴史上の人物から、Thが知らないような人物まですらすらと書いていく。後半の方で、Aがじっくりと考えて書いた『手塚おさむ』にThは驚き、思わず声を上げ、Aの表現の豊かさやユーモアを感じる。最後に、次回も同じことをすること、お互いに歴史上の人物について勉強してくることを提案する。

#6、#4と同様に待合室でAが笑う様子が見られる。古今東西を始める前に勉強してきたかどうか聞くがうなずかない。勉強しなくても大丈夫という余裕の表れのようにThは感じる。歴史の苦手なThは事前に勉強しており、そのことをAにも伝える。#5よりはゆっくりとしたペースで、二人とも一つ一つ時間をかけながら書く。最後に隣の部屋の箱庭を見せ、〈次回はこれを使おうと思うんだ〉と提案する。

第2期 #7～#27 (X年4/6～X+1年2/22)

箱庭の導入とテーマの一致

#7（箱庭1 [写真1]）、Aは進級し、中学2年生になる。Thはしりとりや古今東西でやってきたことを崩さず、発展させるような形で箱庭を用いることはできないかと考え、AとThが交互に玩具を置く方法を試してみることにする。箱庭を作成することを

提案すると、Aに拒否的な様子は見られない。最初からAに好みに置いてもらうことも考えたが、戸惑った様子だったため、最初はTh、次にAという順番で交互に置いていく。まずThが《木彫りの熊》を端に置く。Aは棚をじっくりと見回す。その様子をThは見ているが、見られていることに置きづらさを感じて欲しくなかったため、箱庭のある部屋と隣の面接室とをふらふらと往復する。

5分以上経過してもまだ迷っているように見えたが、ふと箱庭に目をやるといつの間にか『亀』が置いてある。ThはAのいたずら心を感じる。お互いに隅の方から置いていき、Thは箱庭の中央に玩具を置くことに抵抗を感じる。Aも同様に最後まで中央には置かなかった。Aは何かしらのつながりやテーマを考えながら、玩具を選び置いていると感じ、それがどのようなものなのかを考えながらThも玩具を選び置いていく。最終的に二人の置いた玩具がどうつながっていくのかという期待と不安をThは感じる。Aが置いた玩具の近くに自分の選んだ玩具を置いた場合、Aがどう受け取るのかという興味と、侵入的になってしまうのではないかという心配をThは感じる。心配から、Aの置いた玩具の近くに置けずにいると、Aの方から、Thの置いた《時計台》の近くに『カメラを持った男性』を置いてくる。Thは自分が迷っていた部分だけだけに驚き、同時に、AとThが置いて玩具が直接つながりを持ったような嬉しさも感じる。そしてすぐさまその男性の隣に《トランクを持った男性》を置き、最後にも『ラクダ』の近くに《白い服の男性》を置いた。終了時間を告げ、最後にAが置いて終わることを伝えると、Aは《ポスト》の《つなぎを着た男性》の前に『花束を持った男性』を置いた。Thは嬉しさというよりも感動を覚える。

8 (箱庭2)、# 7とは逆に、Aが先に置く。以降、最初に箱庭に玩具を置く順番は毎回交互に変えることにする。また、玩具を置き終わった後に、箱庭に各自でテーマを付けるということを始める(以下、テーマは面接回数の上に『A』、《Th》の順で表記)。用紙を渡すと、Aは時間を掛けて書く。Thは《となり町戦争》と書き、お互い見せ合うと、Aの用紙には『まちなか』と書いてある。二人のテーマには『まち』という共通の言葉が使われていたが、テーマの付け方にThはAとのズレを感じる。最後にテーマと箱庭が写るように交互に写真を撮る。# 9 (箱庭3:『夢の中』《トンネルを抜けて》)、最後にくこの中に主人公がいるとしたら誰かな?>とた

ずねると、Aは戸惑った様子を見せく特にそういうのではないかな?>と聞くとうなずく。Thは主人公を決めて箱庭を作成していたため、少しズレを感じる。

10 (箱庭4:『動物の町』《荒野の故郷》)、新たな試みとして作品のストーリーを各自で考えることにする。Aのストーリーを読むと、かなりしっかりと設定がされており、想像以上の物語が展開しているが、Thのストーリーとはかなりズレていた。二人で一つの作品を作り上げるというよりは、お互いが独自のストーリーを展開している印象を受ける。しかし、自分の置いた玩具だけを用いるのではなく、相手の置いた玩具もお互いのストーリーには取り入れられている。# 11 (箱庭5 [写真2]:『争い』《財宝争い》)、テーマは似ているが、ストーリーを読むとかなりズレはある。Thは思い切って箱庭の中心から玩具を置いていく。最後にThが《サメ》を置くと、その目の前にAは『トラ』を置き、ThはAに対決を挑まれたように感じる。ストーリーを読んだ後にThが書いて渡した質問に、Aは少し考えてから用紙に書いて答える。

作業が増えたために、# 12以降では2回に分けて箱庭を作成する。前回の続きから箱庭の作成を行う場合は、Thが面接前に写真を見ながら再現しておくという方法をとる。# 13 (箱庭6:『砂漠』《塔を目指せ》)、作品に関して、AからThに質問があればストーリーと一緒に書いて欲しいと伝えるが、用紙を見せ合うと、そこにClからの質問は書かれていない。# 14・# 15 (箱庭7:『日本の観光地』《日本庭園》)、初めてAは、『灯籠』『木』『鳥居』などの玩具を一度に2つ選んで置く。今までThが事前に行っていた箱庭の再現は、# 17以降、面接の最初に二人で分担して行うことにする。# 18・19 (箱庭9:『しいく園』《木の下で》)、Aは、面接室にある玩具の中でも一番大きい『木』を置き、そのAの大胆さにThは驚く。また、箱庭作成後の会話の中で、Aは初めて首を横に振って『No』と意思表示する。

20・21 (箱庭10:『工場』、《工場地帯》)、ThはAの顔つきが以前に比べ精悍になったような印象を受ける。# 22・23 (箱庭11 [写真3]:『自然界』《太古の昔》)、新たな試みとして、ストーリーを一枚の用紙に交互に書くということを提案する。ThはAの身長が伸びていたことから、Aは日々成長しており、それに合わせてThも対応していかなくてはならないと感じる。同時に、現在のやり方で面接を進めていくことが、Aに対して適当な援助になっているの

かどうが不安に思う。#26・27（箱庭13〔写真4〕：『飛行場』《飛行場》）、Aは最初に飛行機を置き、この回で初めて二人の付けたタイトルは一致する。Thは一致したことに達成感や二人の作品が上手く出来あがったような感覚を覚える。そしてThは、Aはもう一人で箱庭を作成できるかもしれない、作成したいと思っているのかもしれないと想像する。

第3期 #28～#50（X+1年3/14～X+2年3/27） 中学校への登校と公立高校への進学

#28・29（箱庭14：『住宅街』《昼の町》）、Thの置いた玩具の近くにAが玩具を置くことは一切なく、Aのストーリーの中にもAの置いた玩具しか登場しない。Thは箱庭を作成しながら、終始すれ違っているような噛み合わないような感覚を覚える。#30・31（箱庭15：『雪山』《冬の山》）、Aは最初から『スキーのストックを持った女性』を置く。今まで建造物を置くことが多かったAが、初めて最初に人を置く。その後も、Aは無生物の玩具は一つも置かず、動物や人だけを置いていく。[Aは中学校へ登校し始める] #32・33（箱庭16〔写真5〕：『工事現場』《労働者》）、Aは『ピラミッド』の周りに『重機』と『男性』を、さらにその周りを囲うように『柵』を置く。ThはAに対して近寄り感がなく、Aが一人で箱庭を作成する可能性について再び考え始める。#34・35（箱庭17〔写真6〕：『自然界』《太古の昔》）、Aは槍を持った『子ども』を置き、その前に大きな『虎』を置く。その迫力にThは圧倒される。Aは武器を振りかざした『インディアン』を子どもと虎の間に置き、それはThにはあたかも子どもを守るために父親が虎と戦っているように見える。箱庭作成後に、Aに一人で作ってみる気があるかどうか、箱庭以外に面接でしたいことがあるかどうか尋ねる。その場では決め切れなさそうな様子だったため、次回までに考えて来てもらうことにする。

#36・38（箱庭18：『観光地』《観光地》）、面接に入る前に、これから面接の中でしていくことについて聞くが、今まで通り二人で一つの箱庭を作ることAは選ぶ。Thは気分を変えたくなり、〈今日は赤い砂使ってみない？〉と提案する。テーマが二度目の一致となる。#42〔学校で給食を食べ始め、学校に居る時間も長くなってきている〕#43・44（箱庭21：『戦場』《行進》）。#45・46（箱庭22〔写真7〕：『まほう学校』《魔法学校》）、テーマが三度目の一致となる。ThはAの進路について意識しだし、それに伴い面接のやり方の変更や終結についても考

えるようになる。[Aは志望校を決める]

#49・50（箱庭24〔写真8〕：『広場』《砂浜》）、#50で再現しようとする、Thが#49で置いたピアノが棚になく、予期せぬ出来事にThはしばし呆然とする。箱庭制作後、受験についてたずねると、うなづくことも首を振ることもなく、Aからはっきりとした答えは得られない。だが、ThはAの表情や口の動きは何か伝えたいことがあるように感じる。4月からどうするか、Aが面接の必要性を感じているのか、継続するとしたらどういった形で面接するのかを次回の面接までに考えて来てくれるよう話す。面接を終え受付に戻ると、そこで保護者面接担当者から、Aの高校合格と、高校生活の方に力を入れるため面接はしばらく来ないことになったこと告げられる。Thは今回で終わるということは全く考えていなかったため、動揺し、何も言えないままAの後ろ姿を見送る。Thは終結にしても休止にしても、このままではあまりにも中途半端なのではないか、改めてAと会って話し合いたいという納得できない気持ちに駆られる。そして後日、Aの家に電話をし、もう一度会う約束をする。

第4期 #51（4/24）～53（6/26）

ボードゲームを用いたやりとりと父親の入院

#51、Aは一人で来談。Thは一人で来たことにAの成長を実感する。〈高校合格おめでとうだね〉と言うと、Aはうなづく。学校の様子について話を聞き、これから面接をどうしていきたいか、Aに用紙に書いてもらう。すると『このまま続ける』『毎回違うことをする』と書き、〈今日は何をしようか？〉と聞くと『オセロ』と書く。オセロは30分ほど掛かり、引き分けとなる、Thはその結果に二人らしさを感じる。次の予約日は、Aが希望の日を、カレンダーを指さすという形で決める。#52、はさみ将棋を行う。将棋のセットが未使用なため、駒を袋から出す作業をまず二人で行う。Thが将棋盤を広げテーブルの上に置くと、木製だったため歪みが強く、グラグラと動く。その動きを見て突然Aが「ブッ」と吹き出し、腕で顔を覆いながら笑う。はさみ将棋はAの圧勝で終わる。#53、オセロをし、Aが圧勝する。Thが最後の石を置く際には、一つもAの石を裏返せなくなっており、力なく落とすように石を置くと、Aは#52同様に吹き出して笑う。時間が余ったため、Thが〈どうしようか？〉と聞くと、Aはしばらく考え『今の現状を、』と書く。Aの方から自分のことについて言ってきたことは初めてだったので、Thは驚き〈誰の？〉と聞く

と、Aは『父の』と書く。そして、父親が病気で入院したことが書かれる。Thは突然のことに動揺し、色々と質問するが、Aはしっかりとした様子で現在の状況、今の自分の気持ちや考えていることについて筆談で答える。それによりThは落ち着くことができ、自分の率直な気持ちをA伝えられる。次の面接の予約をいつも通り一ヶ月後に入れて、受付で別れる。

IV. 考察

1. 第1期—相互的やりとりの成立

#1で初めてThとAが二人になる場面で、Thが一方向的に質問し、それにAがうなずきで答えるというやりとりは、お互いにとってかなりの疲労を伴ったと考えられる。Aが次の予約を行きたがらずにキャンセルしたことからそれは言えるだろう。しかし、そのしんどいやりとりを通して見出された二人の共通の話題として【少年ジャンプ】と【ガンダム】がある。以後の面接においても、これらは二人にとって大切な話のテーマとなっていく。

#2～#4では筆談によるしりとりを行う。それによって言葉を用いた会話のように交互に自分の考えたことを相手に伝えられることができ、相互的なやりとりができたと考えられる。また、しりとりのお題をAに決めてもらうことで、ThがAに対して一方向的に要求し、面接の主導権を握ることを避けることもできたのではないだろうか。途中、何度かThが妥協案を提示するがAはそれにのらないという場面があるが、そこから対決のテーマが読み取れる。元来しりとりには勝敗が存在し、いくつかのルールがある。この場面で、妥協案を提示するという行為によってThは自分が優位であること主張し、その提案を飲むことはAにとって負けを認めることと同等だったのかもしれない。提案にのらないことでThに抵抗していたとも考えられる。#4でThの知らない言葉を出してきた時も、Aはやられたらやり返している。ここからはAの負けず嫌いや積極的な部分、自己主張が読み取れる。しりとりを通して、Thは今まで抱いていた自己表現の苦手さや大人しさとは違った印象をAから受ける。これは相互的なやりとりを行ったことで、ただThから質問しているだけでは出てきにくい、本来のAが出てきたからだと考えられる。今から振り返ると、しりとりを用いてやりとりにルールやテーマを持たせたことが功を奏したのではないだろうか。

#5・6ではAが選んだ古今東西を行うが、それに

よりAの得意な歴史をテーマとすることができた。年齢差はあるが、歴史の苦手なThと歴史の得意なAでは、対等というよりもAが優位に立ち、立場が逆転する。Thは事前勉強をしてくるが、Aは勉強してこないという場面では、しりとりの時とは逆にAが自分の優位を主張している。ルールやテーマが設定されたしりとりと古今東西を通して、相互的なやりとりが成り立ち、その中でAの本来の持っているものが表現されたと考察できるのではないだろうか。

2. 第2期—つながりと対決

#7で初めて箱庭を作成した時、ThとAは自分と相手の領域と出方を意識しながら、端の方から徐々に自分の陣地を広げていくような形で置いていく。ここではお互いの駆け引きが展開される。河合雄雄(1969)は、場面緘黙児に箱庭療法を用いた事例において、箱庭の作品が隅の小領域から1年掛けて全領域に広がる過程を“直ちに内的なものを表現することに対する恐怖を示すもの”とし、それが“緘黙という症状にも反映されている”と述べている。箱庭という媒介を通して、Thに自己の内的なものを表現することへのAの恐怖心が感じられる。また、その恐怖心は面接場面だけでなく、現実生活でも色々な場面面でAは感じているのだと推察できる。Aが玩具を選んでいる時、Thは居心地の悪さを感じている一方で、AはThが見ていない隙に玩具を置く。Thは箱庭の中央に玩具を置くことに抵抗を感じ、最後まで置かずに終わる。Aも同様に最後まで中央には置かず、その中央に空いたスペースはThとAの関係や距離感を表していたのだろう。しかし、最後にAはその空いたスペースを飛び越えて、Thの置いた《ポスト》と《つながりを着た男性》の前に『花束を持った男性』を置く。それにより、今まで部分的にしかつながってなかったAとThの置いた玩具が、一つの作品としてまとまりを持ち、テーマが与えられる。また、Thがためらった、相手の置いた玩具の近くに自分の玩具を置くという動きや、最後の距離感を一気に詰めるような動きはかなり積極的な自己主張である。この積極的な行動によって、箱庭作成の主導権はAが握り、古今東西にも見られた立場の逆転が起こる。

#8～#11では、二人のタイトルには使われている言葉は共通したりするが、タイトルの質にはズレがあり、ストーリーにもかなりズレがある。最後のThからの質問も期待通りにはいかない。Aの置いた玩具の近くに自分の玩具を置くということを、Thは

意識して行い、Aも一つの作品にほぼ一回は行っている。タイトルを決める時も、ストーリーを書く時も、なるべくThはAの置いた玩具も含めて考えるようにしており、AもThの置いた玩具を全く無視するということはなかった。AはThに気を遣っていただろうし、Thは一つのまとまった作品にしようと思死だった。互いの考えにズレはあったのかもしれないが、一つの作品を協力して作り、作品に合ったテーマを与えようという姿勢は共有されていたように思う。その暗黙のルールがあったからこそ、ズレたとしても全く二人の世界が別々になることはなく、どこかでつながれていたのではないだろうか。

#11ではThが置いた大きな《サメ》の目の前に、Aはそれに負けないぐらい大きな『トラ』を置く。対決のテーマはずっと二人の間に存在していたが、ここまでAの方から積極的に対決姿勢をとったのはこれが初めてである。この回で、Thは意識的に箱庭の中心に玩具を最初から置いているが、これも今までにない積極的な行動と言っていいたいだろう。これまで、お互いが端の方から置いていき、中心のスペースは最後の方にならないと使われない、もしくは最後まで使われなかった。中心に玩具を置くことで作成の主導権を握ろうとしたThに対して、Aは対決のテーマを持ち出す。それによりThのテーマやストーリーはAの置いた玩具に大きく影響を受け、結果的に主導権はAが握る。ThはAに対決を挑まれたように感じているが、対等の勝負であることが玩具の大きさからも分かる。しりとりでも古今東西でも、AとThはほぼ互角の勝負をしていた。やられたらやり返し、どちらかが圧倒的に優位になることもなかった。ここでもThの積極的な行動に対してはAも積極的な行動で応戦している。そういった行動をとっても大丈夫であろうという信頼関係がAとThの間にはできており、それはどこかでお互いに感じていたのかもしれない。

#12～#19では徐々に作品に統一感が出てくるが、テーマはズレたままである。そして#26・27(箱庭13)で初めてタイトルが一致し、手応えはより二人にとって確かなものになる。相互的なコミュニケーションの積み重ねによって、ズレは小さくなり、お互いの意図やテーマを理解することができたのだろう。Thは、A一人での箱庭作成の可能性について考えている。本当にAが箱庭を自分一人で作成したいと思っていたかどうかは分からないが、そうThに思わせるほど豊かな内的資質や自己主張できるエネルギ

ーをAはそれまでの箱庭で表現してきたのではないだろうか。

3. 第3期—変わるものと変わらないもの

Aが学校に行き出したことは、箱庭の中でも展開されていく。箱庭14でThの感じた違和感は、現実的に動き出したAとそれをまだ知らないThとのズレであっただろう。Aにとって学校は、箱庭16のように何重にも守りを固めなければならないほど、自分の存在が脅かされるような場所だったのかもしれない。あるいは箱庭17のように大きな虎のように自分の前に立ちただかる、挑むべき課題だったのかもしれない。ThはAの迫力に圧倒され、手だし出来ず、周りでThの世界を展開させることしかできない。そしてその迫力から、A一人での箱庭制作が可能であると考え、提案に踏み切る。Thは、面接経過の中で何回かA一人で箱庭の作成は考えているが、この時提案に踏み切ったのはAが学校に行き出したことと無関係ではないだろう。実生活に合わせて、面接の内容も変化させなければいけないという気負いとも言えるような思いがThにはあったのではないだろうか。

しかし、その提案に対し、Aは今まで通り二人で作成することを選ぶ。Thは少しでも今までと違うことをしようとして、箱庭18では赤い砂の箱を使っているが、それもそこまでである。後は#50まで大きな変化なく、ある種淡々と箱庭を作成していく。一方でAの実生活は、登校、受験、進学と大きく変化していく。箱庭21のように、周りからみれば行進のように穏やかで順調そうに見えても、Aにとっては戦場のように過酷で先の見えない状況だったのかもしれない。ここで重要なのは、変わらないということだったのではないだろうか。大きく変化する実生活の中で、変わらず面接に来続けること、今まで通りのやり方で淡々と箱庭を作り続けること。そこに大切な意味があったのではないだろうか。変化にはエネルギーが必要である。Aも家族も学校も今まで以上にエネルギーを使わなければいけなかっただろう。Aにとって面接はエネルギーを溜められる場としても機能していたと考えられる。

#50では予期せぬことが重なる。今から考えると、あるだろうと思っていたピアノがなかったことが、続くだろうと思っていた面接が終結しそうになることを暗示していたようにも思えてくる。ThはAが本当に言いたいことは読み取ることができず、Aに伝えたいことも伝えられないまま、AもThに伝えたいこ

とを伝えきれないまま面接が終結しそうになってしまう。Thは納得できない気持ちに駆られ、もう一度会う約束をとりつけようとし、Aもそれに応じる。突然の終結は二人の間にあるルールには沿わず、テーマとしてもまだ共有されていなかったのだろう。終わるにせよどうなるにせよ、二人の相互的なやりとりの中で決められなければいけない重要なことであり、新しいことを始める時や面接のやり方を変える時はいつもそうしてやってきていたからである。箱庭24のようにテーマが一致しないまま、ズレや不全感を感じながら終わることは二人にとっては納得できなかったのではないだろうか。

4. 第4期—現実を生き抜く力の獲得

Aの高校進学に伴い、面接のやり方も、A自身が毎回やりたいこと提示するというやり方に変わる。自己主張ということで考えればこれ以上のことはないだろう。自己決定や自己主張は、中学に比べると高校ではさらに求められる。場面緘黙であるクライアントにとって、初対面の人物がほとんどである高校生活は、かなりのエネルギーを消耗することとなる。その中で自己決定、自己主張することはAにとっては大きな課題であり、それに対する練習が面接におけるThとのやりとりを通して行われていたと考察できるのではないだろうか。

#51で初めてAが選択したオセロの結果は引き分けに終わり、今まで繰り返してきた互角の勝負がここでも続いている。環境が変わり、面接のやり方が変わっても対等の立場であることは変わらないということ二人の間で確認したようにも見える。#52・53ではいずれもAが圧勝する。立場は対等でも勝負は別である、という良い意味で遠慮や配慮のない真剣勝負が繰り返される。その中で、AがThの前で吹き出して笑うということも起こる。#4・6で父親との間でしか見ることのできなかった笑いが、Thとの間で見られたというのは、はじめにでも触れた、緊張感や不安感がほぐれたことを表しているだろう。真剣勝負と笑い、両方とも関係を築けているからこそのものである。Aの突然の告白によって、そんな二人の間に厳しい現実が付きつけられる。

父親の病気というのはAにとって、またThにとってどうしようもなくリアルな現実には他ならない。今まで、ここまで現実的な話はThから触れることはなく、Aが自分について自発的に語るということとはなかった。動揺するThに対して、一方のAは自分の考え

をしっかりと述べることでThを安心させている。Aが自分にとってもThにとっても重要な情報を、促されたからではなく、伝えるべき情報として判断し、自発的にThに伝えたというのは、Thの成長と二人の関係の変化が大きいだろう。50回以上の面接の中で、しりとり、古今東西、箱庭などを用いた相互的なやりとりを重ね、二人の関係は築かれていき、徐々にAの緊張も和らいでいく。それと並行してAは心身共に成長していき、進学という思春期において重要な課題をも達成する。家族の病というどうしようもなくリアルな現実と向き合い、現状や気持ちを文章で伝えるというたくましさは、出会った頃のAのオドオドとした印象とは大きく異なる。高校進学や親の病気という現実生活での課題と新しいやりとりの中で繰り返される真剣勝負、これらに共通するのは物事や相手に正面からぶつかっていかなければいけないということである。

Aはこれまでの面接を通して人や物事に正面からぶつかる勇氣と強さを獲得したのではないだろうか。いや、その勇氣と強さは元々Aが持っていたものだろう。場面緘黙に隠れて見えていなかった勇氣と強さを、面接の中でAは密かに磨いていたと考えられる。突然の告白は、現実世界に待ち受ける困難な課題に立ち向かっていくためにも、これからも面接を継続していきたいという、決意にも似た意志表示だったのかもしれない。

V まとめ

面接過程で重要になったのは、キーワードでもある“テーマ”と“相互的なやりとり”であった。「しりとり」に始まり、「古今東西」、「箱庭」とテーマ付けと相互的なやりとりは発展していく。箱庭においても、玩具を交互に置く、作品にタイトルやストーリーを付ける、交互に写真を撮る、その全てにこの2つのキーワードが背景としてあった。それらを通して、ThとAは互いに駆け引きし、気を遣い、自己主張しながら協力と対決を繰り返す。距離を測りながら、時には近付き過ぎたりもしながら、徐々に信頼関係を築いていく。同時に、Aの心も身も確実に成長し、おどおどした少年からたくましい青年へと変わっていく。Thの言うことが違っていれば【No】と首を振り、面白ければ笑い、自分の気持ちや考えを自発的に相手に伝えるようになった。現実生活においても中学校生活、公立高校受験を乗り切り、現在も

高校生活、家族の病という課題に立ち向かっている。

Aとの面接過程を検討することで、場面緘黙のCIに対して「しりとり」から「古今東西」へ、そして「箱庭」へのステップを踏んだ過程がスムーズな自己表現の場となることが確認された。また、箱庭を用いて、テーマ付けや交互に人や動物等の玩具を置くことが、ことばを自由に使えない彼に対し、他者とのコミュニケーションを確保する手段として有効であったと考えている。

【謝辞】 この論文の作成・本誌への掲載を快く承諾してくださったCLとご家族に心より感謝申し上げます。またご指導いただきました、浅田剛正先生にお礼申し上げます。

VI 文献

- 河合隼雄（1969）：『箱庭療法入門』誠信書房、94～103
- 高島雄介（2007）：選択性緘黙の子どもとの遊戯療法において身体感覚や身体の在り方に着目する意味、『心理臨床学研究』25（3）、257～268
- 山崎玲奈（2000）：場面緘黙の20歳男性との相互スクイグルによる面接 セラピストのイメージ体験を通して、『京都大学大学院教育学研究科 心理教育相談室紀要 臨床事例研究』27、119～135

